日本英文学会第 91 回大会
2019 年 5 月 25 日@安田女子大学
静岡大学学術院情報学領域　森野聡子

～シンポジアム. **Kazuo Ishiguro, *The Buried Giant*** と中世ブリテンの記憶を語る～

埋葬された＜過去＞・彷徨する＜記憶＞

(1)　Ishiguro の長編小説のテーマ・舞台選択・語りのスタイル

（表１）Kazuo Ishiguro の長編小説リスト

出版年	原題（邦題，出版年）	背景にある戦争・舞台	語り手
1982 年	*A Pale View of Hills* （女たちの遠い夏，1984） （遠い山なみの光，2001）	アジア太平洋戦争 終戦直後の長崎・朝鮮戦争が勃発した 1950 年頃（回想）	エツコ（一人称）: 長崎出身でイングランド人と再婚しイングランドに暮らす中年女性
1986 年	*An Artist of the Floating World* （浮世の画家，1988）	同上	オノ・マスジ（一人称）: 長崎に住む老齢の画家
1989 年	*The Remains of the Day* （日の名残り，1990）	第二次世界大戦 1956 年のイングランド（語りの現在）	スティーヴンズ（一人称）: カントリー・ハウスに戦前から勤める老齢の執事
1995 年	*The Unconsoled* （充たされざる者，1997）	1990 年代？ソ連崩壊後の東欧の民族紛争 プラハを思わせるヨーロッパのある都市での三日間	ライダー（一人称）: 演奏会のために来訪したピアニスト
2000 年	*When We Were Orphans* （わたしたちが孤児だったころ，2001）	上海事変（1930 年代の租界都市上海）	バンクス（一人称）: 上海生まれの私立探偵、10 歳のとき両親が失踪するというトラウマをもつ。
2005 年	*Never Let Me Go* （わたしを離さないで，2006）	1990 年代のイングランド（現在）＋イングランドの寄宿学校（回想）	キャシー（一人称）: ドナー(donor) の看護師 (carer)、31 歳
2015 年	*The Buried Giant* （忘れられた巨人，2015）	アングロ＝サクソン人とブリトン人の戦い アーサー王没後のブリテン島（6 世紀末）	三人称（一部一人称の語り手）

【参照】マルカム・ブラッドベリとの対話

Discussing Ishiguro’s book ‘A Pale View of Hills’ recorded 1982-03-17　より

http://sounds.bl.uk/Arts-literature-and-performance/ICA-talks/024M-C0095X0015XX-0200V0

- ◆　1 人称の語り手による回想というスタイル :「信頼できない語り手」
- ◆　自己正当化や、真実と向き合いたくないために、脚色された＜記憶＞
- ◆　とびとびに思い浮かぶ＜過去の断片＞をつなぎ合わせた語り
- ◆　伝統的なリアリズムの小説ではなく実験的⇒何が起こったのか、どうしてそうなったのか、などは読者が「信頼できない語り手」の言葉の裏側を読んで推理しなければならない。
- ◆　あいまいさ⇒説明できる出来事ばかりではない

(2) *The Buried Giant* (2015) = GB

問題提起：アーサー王文学と初期中世という設定は、単なる目先の選択に終わるのか、テーマと親和性をもつのか？

内容： 遠い地で暮らす息子に会うため、長年暮らした村をあとにした老夫婦。一夜の宿を求めた村で少年を託されたふたりは、若い戦士を加えた四人で旅路を行く。竜退治を唱える老騎士、高徳の修道僧…様々な人に出会い、時には命の危機にさらされながらも、老夫婦は互いを気づかい進んでいく。アーサー王亡きあとのブリテン島を舞台に、記憶や愛、戦いと復讐のこだまを静謐に描く、ブッカー賞作家の傑作長篇。（「BOOK」データベースより）

○　ラテン語年代記におけるアーサー

In illo tempore Saxones invalescebant in multitudine et crescebant in Brittannia. mortuo autem Hengisto Octha filius eius transivit de sinistrali parte Britanniae ad regnum Cantorum et de ipso orti sunt reges Cantorum. tunc Arthur pugnabat contra illos in illis diebus cum regibus Brittonum, sed ipse erat dux bellorum. primum bellum fuit in ostium fluminis quod dicitur Glein. secundum et tertium et quartum et quintum super aliud flumen, quod dicitur Dubglas et est in regione Linnuis. sextum bellum super flumen, quod vocatur Bassas. septimum fuit bellum in silva Celidonis, id est Cat Coit Celidon. octavum fuit bellum in castello Guinnion, in quo Arthur portavit imaginem sanctae Mariae perpetuae virginis super humeros suos et pagani versi sunt in fugam in illo die et caedes magna fuit super illos per virtutem domini nostri Iesu Christi et per virtutem sanctae Mariae genetricis eius. nonum bellum gestum est in urbe Legionis. decimum gessit bellum in litore fluminis, quod vocature Tribruit. undecimum factum est bellum in monte, qui dicitur Agned. duodecimum fuit bellum in monte Badonis, in quo corruerunt in uno die nongenti sexaginta viri de uno impetu Arthur; et nemo prostravit eos nisi ipse solus, et in omnibus bellis victor extitit. et ipsi, dum in omnibus bellis prosternebantur, auxilium a Germania petebant et augebantur multipliciter sine intermissione et reges a Germania deducebant, ut regnarent super illos in Brittannia usque ad tempus quo Ida regnavit, qui fuit Eobba filius. ipse fuit primus rex in Beornica.　(*Historia Brittonum*, c.56)

＜抄訳＞その頃、サクソン人はその数を増やし、ブリタニアで強大になった。ヘンギストの死後、息子のオクタがブリタニア北部からケント人の王国にやって来た。彼からケントの諸王が生まれる。この当時アーサーがブリタニアの諸王とともにサクソン人と戦ったが、彼自身は指揮官 (dux bellorum) であった。〔略〕一二回目の戦いはベイドン山 (Mons Badnicus) で行われ、一日で九六〇人がアーサーの一撃で斃された。アーサーを除いて彼らを打ち負かした者はいなかった。アーサーはこれらすべての会戦で勝者となったのである。こうしてすべての戦いで敗北すると、サクソン人はゲルマニアから援軍を呼び、その数をますます増やしていった。そしてゲルマニアから王たちを呼びよせブリタニアを支配させた。これはイダの治世〔c.547 ～ 559 年〕まで続いた。彼はエオバの息子でベルニキア〔イングランド北東部〕の最初の王である。

偽ネンニウス『ブリトン人の歴史』（829/30 年）第 56 章

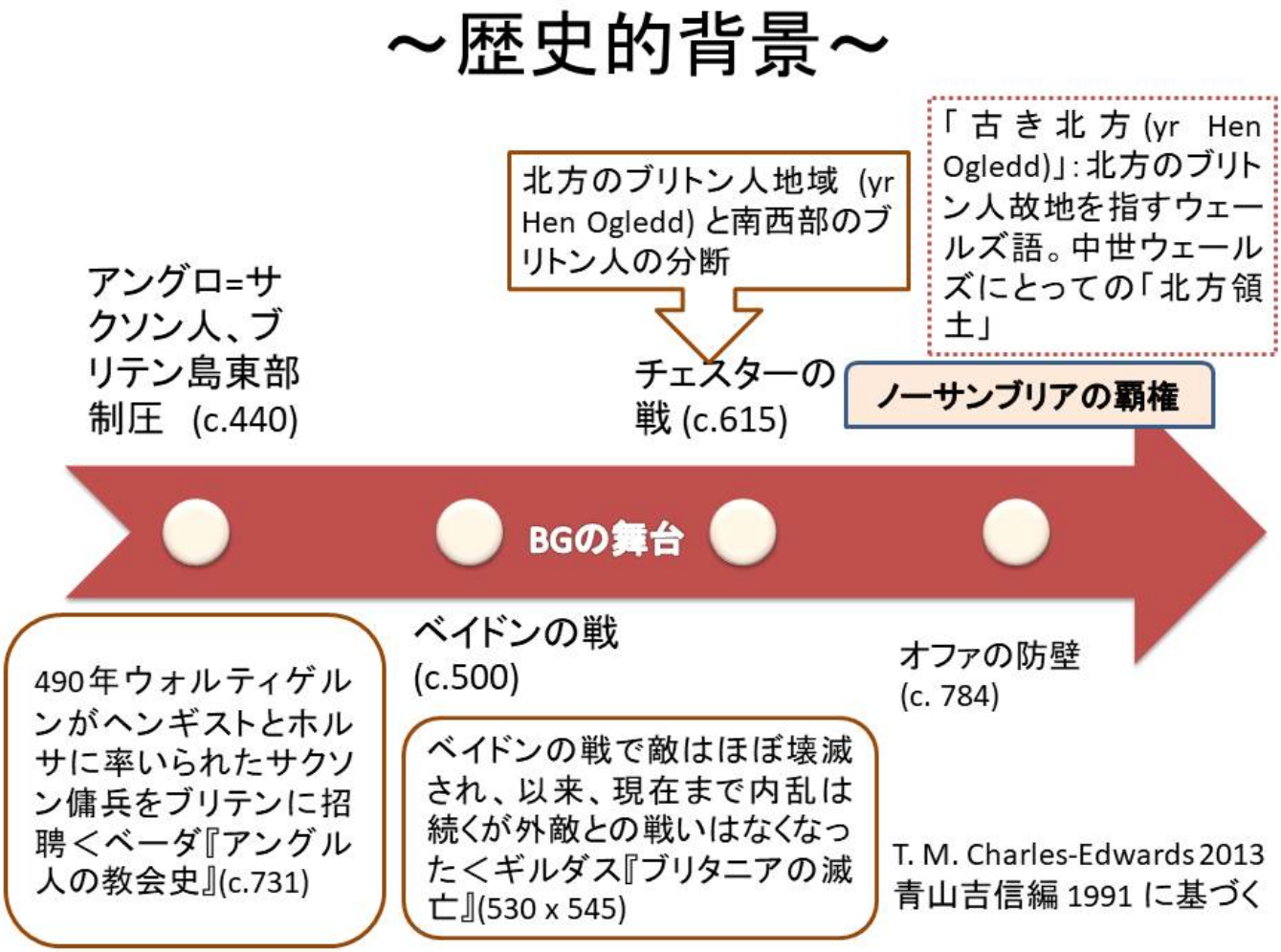
[a72.1] Bellum badonis inquo arthur portauit crucem domini nostri ihu xp'i . tribus diebus & tribus noctibus inhumeros suos & brittones uictores fuerunt .

[a93.1] Gueith cam lann17 inqua arthur & medraut corruerunt .(*Annales Cambriae*, MS. Harleian 3859 version)

第七二年 (五一六年頃) ベイドンの戦い、そこにてアーサーは主イエス・キリストの十字架を三日三晩、肩に背負い、ブリトン人は勝利した。

第九三年 (五三七年頃) カムランの戦い、そこにてアーサーとメドラウドは倒れ、多数の死がブリタニアとアイルランドにあった。

『カンブリア年代記』(950～975 年頃)



（図 1 ）The Buried Giant の物語世界の歴史的背景

○　龍の埋葬にまつわる中世ウェールズ伝承

(1)　赤龍（ブリトン人）と白龍（サクソン人）の戦い :『ブリトン人の歴史』(829/30 年）第 40～42 章

ブリトン人の王ウォルティゲルンは、サクソン人の攻撃から逃れるために、エラーリ〔スノードン〕山中に強固な砦を築こうとするが、いくら土台を組もうとしても一夜にしてなくなるという怪異が続く。

人柱にするため連れてこられた父のない少年が、砦の基礎となる地面を掘れというと、そこには湖があって、箱のなかの二匹の龍が布に包まれ眠っていた。目覚めた龍は戦い始め、最初、劣勢だった赤い龍が最後に白い龍を追い払い、その跡を追って飛び去った。少年は、赤龍はブリトン、白龍はサクソン、我が民がサクソンを海の向こうに追いやることを示していると説明する。少年の名はアンブロシウス、すなわちエムリス・ウレディーグ。

(2)　ブリテン島の護符としての龍の埋葬

✧　『スリーズとスレヴェリスの冒険』(*Cyfranc Lludd a Llefelys*)

- 『列王史』のウェールズ語版に挿入されたスリーズ王（ジェフリのルッド王）のエピソード。最古の写本は Llanstephan I (c.1250)、中世ウェールズ物語「マビノギオン」の一つとして知られる
- ストーリー：ロンドンの名祖として知られるスリーズの治世に、ブリテン島は三つのゴルメス (tair gormes) に襲われた。一つ目はどんな話し声も聞き取ってしまうコラン人、二つ目は五月一日の宵

(Calan Mai)に響き渡り生き物すべての生気を奪う、この世のものとも思えぬ叫び声、そして三番目は王宮の食料がことごとくなくなってしまうという怪異である。スリーズは、弟スレヴェリスの知恵を借りて、これら三つのゴルメスを解決し、その後はブリテン島を平和と繁栄のうちに治めた。

- 二番目のゴルメスの正体：スリーズの民（＝ブリトン人）の龍が異民族の龍に攻撃されてあげる叫び
- 二匹の龍を眠らせ、エラーリの砦ディナス・エムリスの下に埋める

「彼らがこの堅固な場所にいる限り、いかなる災厄も他の地からブリテン島に訪れることはない。
(a hyt tra vont hɷy yn|y ɨle kadarn hɷnnɷ ny daɷ gormes y ynys prydein o le araɨl)」

✧ ブリテン島の三題歌 (Trioedd Ynys Prydain=TYP) における「三つのゴルメス」と「三つの護符」

TYP no.36 Teir Gormes a doeth y’r Enys Hon, ac nyt aeth vrun dracheuyn:

ɷn o nadunt Kywdaɷt y Corryanyeit, a doethant eman yn oes Caswallaɷn mab Beli, ac nyt aeth ɷn un onadunt dracheuyn. Ac or Auia pan hanoedynt.

Eil, Goemes y Gwydyl Fychti. Ac nyt aeth ɷr un onadunt dracheuyn.

Tryded, Gormes y Saesson, a Hors a Hengyst yn benaduryeit arnadunt.

(Perniarth 16，13 世紀末)

この島にやって来た三つのゴルメス、そのいずれもが戻ることはなかった
一つ目、コラン人の群、ベリの息子カドワッソンの時代に到来し、戻ることなし。アラビアより来たれり。
二つ目のゴルメス、グウィジル＝フィクティ。その誰一人として戻ることなし。
三つ目のゴルメス、サクソン、ホルサとヘンギストが彼らの頭目なり。

- Gormes: oppression by an alien race or conqueror, tyranny, violence, burden, vexation, plague, pestilence; destruction, encroachment, intrusion, attack, invasion; rapacity, greed; oppressor, afflictor, enemy, attacker, encroacher; oppressive animal or monster; devourer, pillager, rapacious person or animal; huge person or thing, person or thing of unusual size (*Geiriadur Prifysgol Cymru*)

- TYP no.37 Tri Chud a Thri Datcud Enys Prydein:

Penn Bendigeituran mab Llyr, a gladwyt yn y Gɷynɷryn yn Llundein. A hyt tra vei y Penn yn yr ansaɷd yd oed yno, ny doy Ormes byth y’r Enys hon;

Eil, Esgyrn Gɷertheuyr ɷendigeit a gladwyt ym pryf byrth yr Enys hon;

Trydyd, y Dreigeu a gladwys Llud mab Beli yn Dynas Emreis yn Eryri.

(Perniarth 16，13 世紀末)

ブリテン島の三つの封印と三つの暴露

スリールの息子ベンディゲイドヴラーンの首、ロンドンの白い丘に埋められた。この首がそこにある限り、いかなるゴルメスもこの島に来ることはない。

二つ目、グウェルセヴィル・ベンディゲイドの骨、この島の主なる港に埋められた。

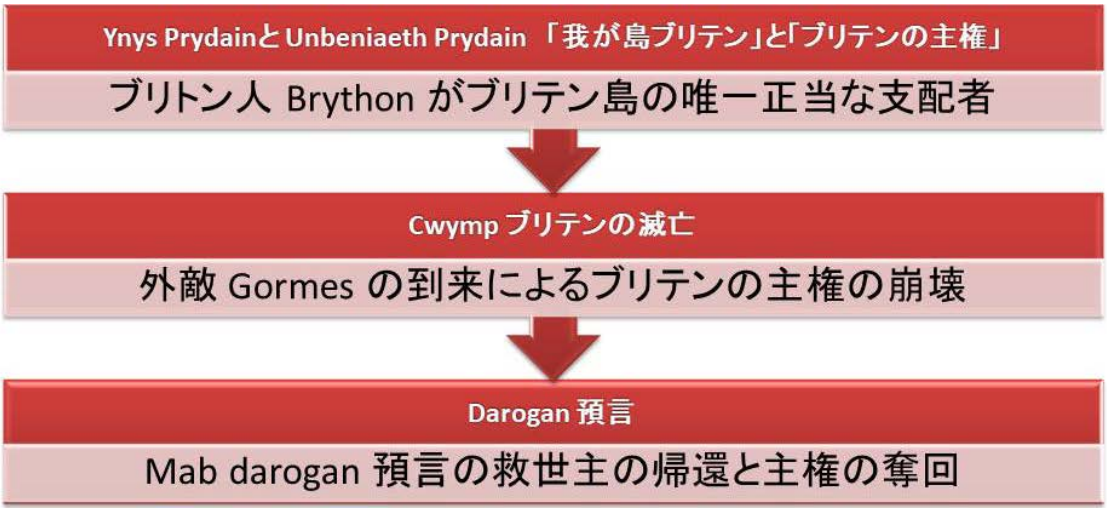
三つ目、龍ども、ベリの息子スリーズがエラーリのディナス・エムリスに埋めた。

❈ ゴルメス⇒「サクソン人」(Ormes o Ssaesson) ＜TYP no.37R (c.1400)

❈ 封印を解いた者（ゴルメスを招き寄せた者）：グウルセイルン（ウォルティゲルン）とアーサー

「そしてアーサーがベンディゲイドヴラーンの首を白い丘から暴いた。というのも、この島を守るのは誰あろう、自分の力以外でなければ正当にあらずと考えたからだ。」(Ac Arthur a datkudyaɷd Penn Bendigeituran o’r Gɷynnvrynn. Kan nyt oed dec gantaɷ kadɷ yrYnys honn o gedernit neb, namyn o’r eidaw ehun.)＜TYP no.37R

○　中世ウェールズ伝承の枠組となる歴史意識



（図 2）ブリット　Brut（年代記）が語る中世ウェールズの歴史意識

(1)　中世ウェールズの民族意識

✧　『ブリット・ディンジェストー』(*Brut Dingestow*,　13 世紀後半) :『列王史』のウェールズ語版の一つ
このうち権利をもつのはブリトンのみ、なぜなら彼らは、他の民族がゴルメスとして襲来する以前から、この島を海から海まで支配していたからだ。
Ac o’r rei hynny nyd dyluedavc neb arnei namyn y Brytannyeyt, canys vynt a’e kyuanhedassant o’r mor bwy gylyd kyn dyuod neb o’r kenedloed ereyll yn ormes arnadunt.

✧　『ブリテン島の名称』(*Enweu Ynys Brydein*)
この島に権利をもつのはカムリ〔ウェールズ人〕自身のみ、かつてトロイから来るブリトン人の子孫
Ac nyt oes dlyet y neb ar (yr) Ynys Honn, namyn y genedyl Gymry chun, Gweddillyon y Brutannyeit, y ddeuth gynt o Gaer Droea. (引用部分は c.1445)

(2)　ブリテンの滅亡

✧　ギルダス『ブリタニアの滅亡』、『ブリトン人の歴史』等

✧　『ゴドジン』(*Y Gododdin*) : 600 年頃、北方のブリトン人の王国マナウ＝ゴドジン（現在のエディンバラ付近）がアングロ＝サクソンの国デイラに遠征し、壊滅した史実に基づく。
ゴドジンの王マナゾウグはデイラ軍と戦うために 300 人の勇士を集め、エディンバラの王宮で 1 年間、ワインや蜂蜜酒で歓待する。黄金のトルクに身を飾り、戦場へと馬を進め、カトラエスの地（現在の北ヨークシャー、カテリック）で敵と対峙したゴドジン軍は、百万の大軍を前に壊滅、生還できたのはわずか 1 名だった。以上の出来事を背景に、詩人アネイリンは、戦場で散った若武者たちへ捧げる挽歌を連綿と歌う。

(3)　ブリテンの再興

✧　『ブリテンの預言』(*Armes Prydein*, c.930) : マブ・ダロガン (mab darogan)―約束されし預言の勇士たち（カナンとカドワラドル）―が到来するとき、ブリトン人は再び立ち上がり、サクソン人はこの島から追い出されるだろうと歌う。

✧　アーサーの不死伝説と帰還

○ BG の語り：龍を殺し、忘却の霧を消すことで、忌まわしい過去の記憶が蘇る
↓

◆ Ishiguro 作品に通底するテーマ：あったことをなかったことにすることへの違和感・「平和／友情」の欺瞞

✧ *A Pale View of Hills*：戦後の長崎が舞台だが「原爆 (the atomic bomb)」という表現が使われるのは 1 か所のみ

➢ サチコと稲佐展望台から見た長崎の風景

"You wouldn't think anything had ever happened here, wouldn't you? Everything looks so full of life. But all that area down there"—I [Sachiko] waved my hand at the view below us—"all that area was so badly hit then the bomb fell. But look at it now." (Ishiguro 1982: 110f)

➢ オガタさんと訪れた平和公園

the memorial itself—a massive white stature in memory of those killed by the atomic bomb—presiding over its domain. . […] It was always my feeling that the statue had a rather **cumbersome** appearance, and I was never able to associate it with what had occurred that day the bomb had fallen, and those terrible days which followed. Seen from a distance the figure looked almost comical, resembling a policeman conducting traffic. (137f, 強調は筆者)

◆ BG の視点＝勝者・征服者（イングランド）の側？

✧ サクソン戦士ウィスタンの口から語られる「復讐」を受けるブリトン人の末路

'… our armies will grow larger, swollen by anger and thirst for vengeance. For you Britons, it'll be as a ball of fire rolls towards you. You'll flee or perish. And country by country, this will become a new land, a Saxon land, with no more trace of your people's time here than a flock or two of sheep wandering the hills untended.' (p.340)

✧ 物語の語り出し

You would have searched a long time for the sort of winding lane or tranquil meadow for which England later became celebrated. There were instead miles of desolate, uncultivated land; here and there rough-hewn paths over craggy hills or bleak moorland. Most of the roads left by the Romans would by then have become broken or over grown, often fading into wilderness. Icy fogs hung over rivers and marches serving all too well the ogres that were then still native to the land. (p.3)

✧ We とは誰なのか？

I have no wish to give the impression that this was all there was to the Britain of those days; that at a time when magnificent civilisations flourished elsewhere in the world, we were here not much beyond the Iron Age. (4)

【引用出典】

Ishiguro, Kazuo 1982. *A Pale View of Hills*, Faber and Faber.

Ishiguro, Kazuo 2015. *The Buried Giant*, Faber and Faber.

****

Annales Cambriae. *Annales Cambriae. The A text. From British Library, Harley MS 3859, ff. 190r–193r*. Transcribed by Henry W. Gough-Cooper, First edition. The Welsh Chronicles Research Group. 2015 http://croniclau.bangor.ac.uk/documents/AC_A_first_edition.pdf

Armes Prydein. *Armes Prydein. The Prophecy of Britain from the Book of Taliesin*, Sir Ifor Williams (ed.), Dublin: The Dublin Institute for Advanced Studies, 1982.

Bede, *Historia ecclesiastica gentis Anglorum*, Jeffrey Henderson (ed.), Loeb Classical Library, 1930.

Brut Dingestow, Henry Lewis (gol.), Caerdydd: Gwasg Pryfisgol Cymru, 1942.

Cyfranc Lludd a Llefelys. Diana Luft, Peter Wynn Thomas and D. Mark Smith (eds.), Rhyddiaith Gymraeg 1300-1425, Cardiff: School of Welsh, Cardiff University, 2013. http://www.rhyddiaithganoloesol.caerdydd.ac.uk.

Gildas, *De Excidio Britanniae*, Theodore Mommsen (ed.), Chronica Minora Saec. iv, v, vi, vii vol. 3, 1-85, Berlin: Monumenta Germaniae Historica, Scriptores, 1892, reprinted 1961.

Y Gododdin.　*Aneirin: Y Gododdin, Britain's Oldest Heroic Poem*, A. O. H. Jarman (ed. & trans.), The Welsh Classics Series vol. 3. Llandysul: Gomer, 1988.

Historia Brittonum. *Nennius, British history; and the Welsh annals*, J. Morris (ed. & trans.),,History from the Sources, 8, London: Phillimore 1980.

Historia Regum Britanniæ. *The Historia Regum Britanniæ of Geoffrey of Monmouth with contributions to the study of its place in early British history*, Acton Griscom and Robert Ellis Jones (eds.), London: Longman, 1929.

Trioedd Ynys Prydein. *The Triads of the Island of Britain*, Rachel Bromwich (ed.), the fourth edition, Cardiff: University of Wales Press, 2014.

【参考文献】

青山吉信 1985. 『アーサー伝説―歴史とロマンスの交錯』, 岩波書店.

青山吉信（編）1991.『イギリス史 I―先史～中世―』, 山川出版社.

森野聡子 2016. ウェールズ伝承文学におけるアーサー物語の位置づけ,『アーサー王物語研究　源流から現代まで』, 中央大学出版部, 33－80.

森野聡子.『中世ウェールズ物語集マビノギオン』（仮題）, 原書房（2019 年刊行予定）.

Bromwich, Rachel, A. O.H. Jarman, and Brynley F. Roberts (eds.) 1991. *The Arthur of the Welsh, The Arthurian Legend in Medieval Welsh Literature*, Cardiff: University of Wales Press.

Charles-Edwards, Thomas 1991. The Arthur of History, in Bromwich, Rachel, A. O.H. Jarman, and Brynley F. Roberts eds., 15-32.

――2013. *Wales and the Britons, 350-1064*, Oxford: Oxford University Press.

Dumville, D. N. 1975-6. 'Nennius' and the *Historia Brittonum*, *Studia Celtica*, vols. 10/11, 78-95.

Huws, Daniel 2000. *Medieval Welsh Manuscripts*, Cardiff: University of Wales Press.